

## 水門付近の底質の変化

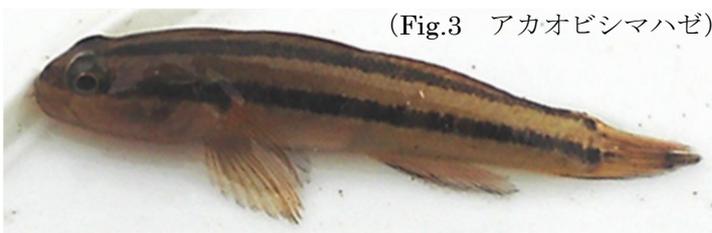
### ■泥地から砂地に戻る

6月8日の調査で、導流堤水門付近（Fig.1）の底質が泥地になっていたことを確認した（レポートNo.445参照）が、今回の調査では砂地に戻っていた（Fig.2）。砂地と泥地では生息する生物が異なる。これまでの調査で、イシガレイの稚魚は砂地で多く採集され、導流堤の水門付近では多くの個体を採集してきた。今年は泥地になってから採集できなかったが、砂地に戻った現在のままであれば来年はイシガレイを観察できると思われる。

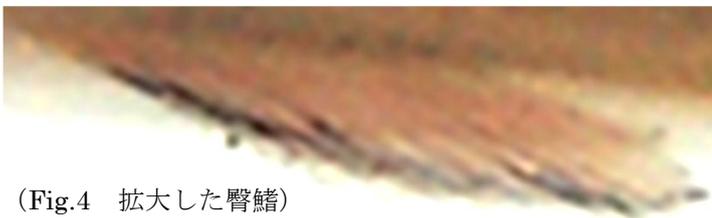


(Fig.1 導流堤水門付)

### ■アカオビシマハゼ



(Fig.3 アカオビシマハゼ)



(Fig.4 拡大した臀鰭)



(Fig.2 導流堤水門付近底の砂)

ペットボトルを加工したセルビンでアカオビシマハゼを6匹採集した（Fig.3）。シモフリシマハゼと似ているが、臀鰭に2本の赤色の縦線が存在する（Fig.4）。9月には同じセルビンを使いタカノケフサイソガニを6匹採集したが、今回の調査では1匹も入らなかった。

### ■成長したマハゼ

秋はハゼ釣りの季節であり、調査当日も多くの人々がハゼを釣っていた。Fig.5は釣り人に撮影させていただいたマハゼである。潟湖内で釣り上げられた個体で、蒲生干潟ではマハゼが成長する環境が保たれている。



(Fig.5 マハゼ)

(佐藤 賢治)